

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

フリンジのシェイクスピア
——リリック・ハーマスミスの『夏の夜の夢』

狩 野 良 規*

『夏の夜の夢』は、舞台を見るより戯曲を読む方が好きだ。疲れている時に、シェイクスピアの叙情的な詩をほんの数ページ読むだけで、ウトウトと気持ちよくなってくる。年をとった。このごろ本を開くと、すぐに眠くなる。

一方、劇場にこの芝居を見に行くのは、ちょっと勇気がいる。歌や踊りのたっぷり入ったロマンティックな幻想劇だから、演出家がいろいろといじくれる。ついつい演出過多になって、観客の疲れを癒すどころか、かえって疲労感を増幅させる舞台になることも多い。

むろんピーター・ブルック演出の『夏の夜の夢』(RSC, 1970 年初演)のような、一時代を画する伝説的な公演もあった。だが、意欲満々でついつい「原作の精神」から離れ、いったい何を見せたいのか、舞台からシェイクスピアの香りが全然漂ってこない凡作も少なくない。

そう、僕はもうあちこちに何回も書いたが、ロンドンの^{シェイクスピア}沙翁劇は、「戯曲の精神」を外していると、劇評家たちから徹底的にぶっ叩かれる。原作にある時代や場所の設定を守る公演はもはやあり得ず、安全路線の教科書的な演出も考えられず、しかし戯曲の咀嚼なきアイデア先行の舞台は、痛烈な皮肉を込めて酷評される。それは有名どころの演出家に対しても、まったくお構いなし。

だが同時に、実に公平だと思うのは、フリンジ(実験劇場)の芝居も、ウエス

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

ト・エンドの商業劇場の公演と同様に、各新聞・雑誌に批評が掲載されることである。劇場街の周辺にある小劇場の低予算の芝居にも、批評家たちはしっかりと目配りをしている。

そんな劇評の中で、僕の昔からのお気に入り、ロンドンの週刊情報誌『タイム・アウト』の辛口の批評である。おせじで誉めないから、『タイム・アウト』が勧める芝居を見に行けば、まず外れはない。日本の批評とは大違い！¹⁾ また、今はインターネットで、自宅にいながらにしてロンドンの劇評が読める。便利な時代になったものだ。

今春、エドワード・ボンドの『ビンゴ』²⁾ を鑑賞するついでに、さて演劇の都で何を見ようかと『タイム・アウト』のホームページを覗いてみれば、4つ星（満点は5つ星）がついて、しかも毎週「批評家のお勧め」欄に登場していたのが、リリック・ハーマスミス（Lyric Hammersmith）と演劇集団フィルター（Filter）による『夏の夜の夢』（演出ショーン・ホームズ）だった。フリンジのシェイクスピア劇！ほんとうに面白いの？若手俳優ばかりのハチャメチャな芝居らしいのだが。行ったことがない劇場、知らない演劇集団。いくら『タイム・アウト』のご推奨とはいえ、半信半疑で、天井桟敷の切符を取ってみた。

ハーマスミス。ロンドンの中心部から地下鉄のピカデリー線で西へ20分ほど。すぐ駅前にある、イギリス人の好きな由緒を感じさせる建物とはほど遠い、近代的で平凡なビルの中にあるリリック・ハーマスミス劇場。う～ん、想像していたのと違う、叙情的にあらず。

-
- 1) ロンドンの劇評に慣れると、日本の批評はととても読めない。大甘。批評家が誉めても、誰もそれをことばどおりに信用しないだろう。いや、評論家を責めるつもりはない。商売の邪魔をしたら次から仕事が来なくなる。だから、フリーの批評家ほど、自由にものが書けない。かく言う僕は、つまらない作品を面白いと評したくないので、学校勤めをしている。月々の給料あつての言論の自由である。それでも、公演中の芝居や封切り中の映画の悪口は書かないことにしている。ほとぼりが冷めて、誰も振り向かなくなってから、僕なりに本音で批評しているつもりだ。
 - 2) 拙論「シェイクスピアは人生を達観したか——エドワード・ボンド『ビンゴ』雑感」（『青山国際政経論集』第8号、青山学院大学国際政治経済学会、2012年9月所収）参照。

それでもパンフレットを読むと、100年以上の歴史があるという。ハロルド・ピンター、ジョン・ギールグッド、ロベール・ルパージュなども公演を行なったとか。失礼しました。

若者の教育に力を入れているという。事実、建物に入ると、ロビーは若い連中でいっぱい。いつもシェイクスピアを見る芝居小屋の雰囲気とは違うのだが、でもワイワイガヤガヤ、とってもいい感じだ。「スタジオ」と呼ばれる劇場に入ると、これも予想とは異なり、オペラ座をギュッと圧縮したような、ウエスト・エンドにもよくある普通の造り。舞台も張り出し舞台かと思っていたら、スラスト・ステージ
プロセニウム・ステージ 額縁舞台。開幕前、場内には明るくてポップな音楽が流れている。

舞台に、若いのだろうが髪の毛はもう薄くなったひとりの男が現れ、ひたすら早口でしゃべりまくる。「観客はいずれ後悔するだろうよ、あ～あ、今晩は『男一人に主人が二人 (One Man, Two Guvnors)³⁾』を見に行けばよかったなんて……ブツブツブツ。」場内は爆笑しているが、はて、何を言っているのやら、よくわからない。相当ひどいアイルランドなまり。

男はエド・ゴーハン、音楽集団「ロンドン・スノーケリング・チーム」のメンバーで、職人のクインスを演じる役者、そしてリード・ギターも担当する。

1幕が始まる。アテネの大公シーシュース (ジョナサン・ブロードベント) は黒縁のメガネにカジュアルなジャケット、ちょっと上流の雰囲気を醸す若者。おっ、ちゃんとシェイクスピアの韻文を朗じている。周りの宮中の面々も含めて、まともまとも。よかった、このままアイルランドなまりの英語が続いたら、どうしようかと思っていた。

ほどなく大公とアマゾンの女王ヒポリタの結婚を祝おうとするアテネの職人たちが登場する。だが、ボトム姿が見えない。妖精パックの魔法でロバにされてしまうボトムがいなくて、どうやって『夏の夜の夢』を上演するんだ。

ボトムは特別ゲストが演じるとか。クインスが、「サー・イアン・マッケラ

3) 2011年に国立劇場が初演し、今はウエスト・エンドに劇場を移して大ヒットが続けている喜劇。カルロ・ゴルドーニ原作の18世紀イタリア即興劇『二人の主人を一度に持つ』、あの道化者アルレッキーノが活躍するコメディ・デラルテの芝居を、1960年代のブライトンの話に置き換えた翻案劇。演出ニコラス・ハイトナー。

ン」と発表すると、場内から「キャ〜ッ!」。ほほう、たしかにマッケランはイギリスを代表する舞台役者。でも、ずいぶん爺さんだぜ。いや、そもそもロンドンの劇場でこんな黄色い声が飛ぶのを聞くのは初めてだ。新鮮、新鮮。

だが、横から「彼は来れない」と耳打ちされる。そりゃそうだろう、マッケランがこんなB級のショーに出るはずがない。で、職人たちは客席に向かって「誰かボトムをやってくれないか」、「おまえ、どうだ」。すると客のひとりが、「いいよ」。えっ、太った男が舞台上がってくる。どうやら客ではなく、役者らしいのだが、パンフレットにはクレジットされていない。

と、こんな調子。これって、ほんとうにシェイクスピア?! 客席はゲラゲラ、ガハハ笑っている。けれども、俳優たちは日本の若手お笑い芸人とはレベルが違う。笑わせ方が堂に入っている。本物のコメディアンだ、そしてシェイクスピアのセリフも節目節目でちゃんとしゃべっている。つまりは、若いのに演技力もセリフ術も身につけた俳優たちが、素知らぬ顔をしてふざけているのである。

2幕に入って、妖精の王オーベロンが登場すると、先ほどのシーシェースと同じ役者。スーパーマンのコスチューム。青いタイツ、胸にはSならぬ、オーベロンのOの文字、背中にマント、腰のセーフティベルトは白地に赤十字。どうやら大人になりきらないピーターパンのような正義の使者らしい。

一方のタイテーニアは、生地が透けた黒のスカートをはいたセクシーな女王、乳離れしていないオーベロンとは好対照な役作りである。ヒポリタと一人二役。

シーシェースとオーベロン、ヒポリタとタイテーニアを同じ俳優に演じさせて、アテネの宮廷社会と森の妖精の世界をつなぐ工夫は、ピーター・ブルック以来おなじみだが、それにしても計10人で、王族・貴族と妖精と職人と、それから音楽、ギターとキーボードとドラムの生演奏をすべて引き受ける。若いっていいなあ。

妖精たちは姿を見せない。パックは——リリックの黒いTシャツを着た、無愛想な舞台監督風の男（ファーディ・ロバーツ）が、そうらしい。子供っぽいオーベロンを、むしろパックがリードしている。妖精が空を飛ぶ場面は、ミュー

ジシャンたちが「ヒューッ」と音を出し、黒衣の舞監^{フカン}が右へ左へと顔を動かして、高速で飛びまわる様子を目で追っているよう。ライブの音響だけで、観客の想像力に訴える。おシャレ！

惚れ薬は青いペンキのようなもの。それをライサンダーにかける。さらに、タイテーニアにも乱暴に浴びせるのだが、舞台の奥に白いタイルの浴槽のセット。青い液体をかけられた妖精の女王は、崩れるように浴槽の中で失神する。これが青でなく赤だったら、さながら血まみれの殺人現場。サイコスリラー映画の乗りである。

なんともはや、メンデルスゾーンの『夏の夜の夢』序曲からは遠く離れてしまった。19世紀ドイツ浪漫派を代表する一曲。マックス・ラインハルトとウィリアム・ディーターリの戦前のハリウッド映画『真夏の夜の夢』（1935年）も、メンデルスゾーンをふんだんに使っていた。甘美で、安心して笑える、古きよき時代のシェイクスピア。

しかし戦後は、シェイクスピアの恋愛喜劇の裏に、抑圧された性的欲望や愛する者への悪意を読み取るようになる。フロイトの発見した、潜在意識下で人間を突き動かす衝動は、両大戦で人間の残虐性を極限まで見せつけられた後、ついにコメディにまで暗い影を落とす重要な要素となる。ヤン・コット⁴⁾もピーター・ブルックも、フロイトの衣鉢^{いはつ}を継いで、1960年代の寵児となった。

いや、沙翁劇だけではもちろんない。ヒッチコックの『サイコ』は1960年の大ヒット映画。悪夢のような浴場での殺人シーン、人間の潜在意識の闇を突きつけるラスト。今見ても、ゾクゾクする。その後は、映画でも演劇でも、フロイトは当たり前のように援用され、消化された。今やフロイトは無意識^{みよし}になった。

お話は『夏の夜の夢』。ロバにされたボトムをどう見せるか。今さら着ぐるみでもないだろう。と思っていたら、音だけ。ボトムの声が変わる。歩くと、

4) ヤン・コット（1914–2001年）はポーランドの演劇評論家。大戦中はヒトラーに抵抗し、戦後はスターリンに弾圧され、その皮膚感覚で書いた『シェイクスピアはわれらの同時代人』（英語版1964年）は、世界中のシェイクスピア劇上演に多大なる影響を与えた。

ミュージシャンたちが奏でる^{ひづめ} 蹄の音。そして、ボトムがロック調の歌を歌うと、タイテーニアがすり寄ってくる。

視覚芸術たる映画に比べれば、演劇ははるかに俳優のセリフを聴きながら想像の世界に楽しむメディアである。それは活字を読みながら想像をめぐらせる小説の遊び方に近い。一時、演劇は舞台装置や照明の発達によって“見せる”娯楽になろうとしたが、映画がライバルになってからは、ふたたび観客の想像力を喚起する方向に舵を切った。されば、「何もない空間」と。

“人力”による、音響だけのバックとボトムの見せ方、いや聴かせ方。これぞ演劇——なあってうっとりしているのは、オジサンだけかもしれない。舞台では所狭しとドタバタ騒動が展開する。壁の一部が紙でできていて、口論になった恋人たちがそれを破ってステージに登場する。額縁舞台の前方がなぜか突出していると思っていたら、そこも床が紙でできた落とし穴になっていて、オーベロンがみごとにはまる。彼はやがて、天井を破って、宙吊りで降りてくるシーンも。

恋人たちの喧嘩はエスカレートし、物を投げ合う。白い粉。俳優全員がそれを投げはじめ、ほどなく客席にも。粉を舞台に投げ返す観客もいる。すると、役者が観客を指さし、「おまえ、やったな」。僕が見た日は、2階席にやたらと笑う女の子がいた。その笑い声に釣られてボトムが思わずニヤリ。が、こうなってくれば、つつい客席と即興で掛け合いをやりたくなるものだが、それは最低限にとどめている。

毎日、動きが違うのは間違いない。だが、アドリブでやっているようで、俳優たちは頭の中で、常に綿密に計算しているのだろう。“芸”と呼べるレベルのインプロビゼーション（即興）！

恋人たちは舞台に張ったポータブル・テントの中でよろしくやっているよう。バックがマイクを近づけると、中から艶っぽいセリフが聞こえてくる。また、ライサンダーとディミートリアスは赤外線銃を構えたつもりで対峙。いろいろな映画やテレビゲームからのパクリが入っている。オジサンは知らないネタも多いのだが、若い観客たちは、もう大はしゃぎ。

スーパーの袋に忍ばせた食べ物を投げ合うころには、バックがオーベロンに、「おい、座れ」。二人で演出家よろしくデッキチェアに腰かけ、はては缶ビールにつまみまで口にしながら、舞台の惨状を眺めている。

5 幕の職人たちの劇中劇は、ライオンの怒鳴り声を、これまたライブの音で作っている。ピラマスとシスビーの物語は、この公演ならお茶の子さいさい、ご想像のとりの滑稽さ。

終幕はバックが、メチャクチャになった舞台を無言で見まわす。アナーキーな祭りの後の虚しさを噛みしめ、そしてシェイクスピアのエピローグのセリフできちんと締めくくる。

『夏の夜の夢』はシェイクスピアがまだ 30 歳をちょっと過ぎたころに書いた、『ロミオとジュリエット』、『リチャード二世』と並ぶ、彼の最も叙情的な作品である。だから、メンデルスゾーンが 17 歳で作曲した浪漫的な序曲は「原作の精神」に忠実といえよう。

しかし、フロイト以降、夢はすっかりロマンティックではなくなってしまった。そう、抑圧された本音がデフォルメされた形で出てくる、と。それは悪夢のこともしばしば。けれども、この芝居、ブルックでさえ、今からみると叙情的な部分をずいぶん残している。バッサリとカットはしていない。

フリンジの『夏の夜の夢』は、若い観客が心から楽しめ、自分も将来、芝居をやってみたいと思うようになる舞台である。その点、リリック・ハーマスミスの教育目的にぴったりと適っている。しかし同時に、うるさい^{かな}ロンドンの劇評家たちがこぞって「戯曲の精神」に忠実だと絶賛する本格派(?)の公演でもあった。

原作の叙情性を犠牲にし、なお 21 世紀の夢判断に照らして「戯曲の本質」をみごとに捉えた若者芝居である。脱帽。(2012 年 9 月 脱稿)